

## 詐欺の社会学序説\*

萩野昌弘\*\*

本論は、詐欺という概念が、既存の社会学理論を整理するうえで役立つだけでなく、社会とは何かという謎にせまるうえでも重要な役割を果たすことを示そうとするものである。

### 1 詐欺と社会学

#### 法と社会学

詐欺という言葉には、人々を魅了する不思議な響きがある。それは、詐欺が人間存在の深淵をかいま見せるからである。詐欺事件が、新聞の社会面を賑わせ、テレビのワイドショーで取り上げられるのも、読者や視聴者が、そこに暗黙のうちに人間の本性を見ているからである。

詐欺はただの違法行為ではない。ある行為が、現実の法に触れるかどうかは社会的には二次的な問題である<sup>1)</sup>。人々が、ときに客観的に批判し、ときには抵抗しながら、しかしだまされてしまうこともある誘惑の種。それが、詐欺であろう。法や道義的責任が問われる以前の、誘惑し、誘惑される関係を、社会学では詐欺と呼ぶべきでなのである<sup>2)</sup>。

#### 秘密と詐欺

社会学者のなかで、いち早く詐欺概念の重要性に気づいていたのは、ゲオルグ・ジンメルである。ジンメルは、人間が他人の内面を完全には理

解できない以上、他人に真実を示すことも、他人をあざむくことも共に可能であるという<sup>3)</sup>。しかも、人間は生きていくためにしばしば欺瞞を必要とし、自ら進んでだまされることさえある点を指摘している。ここには、詐欺が、人間関係が成立する根本に常に伏在しているという視点がある。

ジンメルは、商取引を例に出しながら、詐欺はふたりのあいだの知識の保有量に著しい差があるときに生まれやすいという。売り手に比べ、買い手は商品に関する知識が明らかに劣っている。したがって、売り手にだまされる可能性がある。事実、商品の売買をめぐるトラブルは、ジンメルの時代に比べ、はるかに商品経済の発達した今日でも絶えることがない<sup>4)</sup>。商取引に限らず、本来、会話によるコミュニケーションは、相手の言葉が正しいかどうか、逐一確かめられることなく進む。実際、いちいち、相手のいっていることを確かめようとしていたら、会話は成り立たないだろう。しかし、そのために相手にだまされることもある。詐欺は、コミュニケーションがあるときに、不可避免的に伴う危険である。

少なからずジンメルの影響を受けたシンボリック相互作用論者<sup>5)</sup>も、詐欺に関してジンメル同様の見解を示している。たとえば片桐雅孝は、詐欺は状況を定義する情報量と情報操作能力のちがいが生じると考えている<sup>6)</sup>。ニセの宝石を売ろうとする詐欺師は、宝石商のふりをしながら、あた

\*キーワード：詐欺、コミュニケーション、秘密

\*\*関西学院大学社会学部助教授

1) 法における詐欺の位置づけに関しては別に論じる。

2) Baudrillard の誘惑論参照。Baudrillard, J., *De la séduction, De Noël*, 1979.

3) ジンメル『秘密の社会学』（居安正訳）世界思想社、1979年、8頁。

4) 交換と詐欺については別に論じる。

5) アメリカの社会学者ハーバート・ブルーマーの命名による。個人間の「相互作用」に着目する社会学理論で、「シンボリック相互行為論」「象徴的相互作用論」とも訳される。

6) 片桐雅隆『プライバシーの社会学』世界思想社、1996年、23-24頁。

かも取引が正当であるかのようにふるまう。だまされる側は、詐欺師が作りだす状況を本当だと信じ込み、詐欺師のしかけている罠に気づかない。ある取引の状況において、一方が保有する情報量が他方に対して著しく乏しいときに、詐欺の可能性が生まれるのである。

シンボリック相互作用論者が詐欺の事例を用いるのは、実際のコミュニケーションにおいて、人々は特定の役割を演じているにすぎない点を強調したいからであろう。演技が、真実であるかどうかは問題ではない。その場その場で、適切にふるまうことができれば、コミュニケーションは成立するのである。つまり、コミュニケーションを論じるうえで重要なのは、そこではお互いが相手に対して適切な演技をしているように見えさえすればよいという点である。詐欺師は、このようなコミュニケーションの演技的性格を最大限に利用しながら、相手ににせものを掴ませようとする存在である<sup>7)</sup>。

ただ、詐欺は、だまそうとする相手に対して情報量、知識量において優位に立つこと、相手に対する「秘密」を積極的に作りだす技術として捉えるだけでは十分でない。その理由のひとつとして、人は一方的に詐欺師にだまされるのではなく、自ら進んでだまされていく場合があるという点が挙げられる。トーマス・マンの小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』のなかで、クルルは、誘惑されたいという欲望、より端的にいえばだまされたいという欲望は、「神が手ずから人間性に植えつけた普遍的な欲望である」という<sup>8)</sup>。人は単に無知だからだまされるのではなく、喜んでだまされにいくこともあるとクルルはいうのだ。ジンメルは、この点について簡単に触れてはいるが、議論の中心はあくまでコミュニケーションにおける情報量の差にある。

そこで、ある詐欺事件を通じて、ジンメルやシンボリック相互作用論者などが見過ごしていた詐欺の特質、そしてコミュニケーション自体の特質

がどこにあるのか、詳しく見てみよう。取り上げるのは、1975年に発覚した足利銀行横領事件である。事件の概略は次の通りである。

### 足利銀行横領事件

足利銀行栃木支店の貸付係大林章子(仮名)(当時21歳)は、仙台へ向かう新幹線の列車の中で、「ゴルゴ13を追って旅をしている国際秘密諜報員」と名乗る男と知り合う。大林は、この男の話の真偽を問うことはせず、あたかもこの男が本当の国際秘密諜報員であるかのように対応し、ためらうこともなく、ごく自然に男との関係を結んでいく。知り合ってから10日で、男は国際秘密警察の組織を抜けるために資金が必要だといひ、大林に資金の融通を頼む。大林ははじめに60万円(父親の貯金)、次に70万円(自分の貯金)を男に渡し、3回目からは架空の貸付をでっち上げて、約2年間にわたり、計53回総額2億円を足利銀行から引き出す<sup>9)</sup>。

大林は、公判で、最初に金を渡したときの気持ちを聞かれて、「申し訳ないですが、なぜ渡したのかわかりません。好意をもっていただけです<sup>10)</sup>」と答えている。大林自身、なぜ正体不明の男に金を貸したのか、もはやわからない。ただ公判の供述から推測することができるのは、男が大林のありのままを受け入れていたという点である。大林は幼いころに人指し指の先をなくし、他の銀行員から「指のない女と握手するのは気持ちが悪い」といわれて傷ついていた<sup>11)</sup>。ところが、男は指の欠損がある女性とそうでない女性というような差別はしなかった。

男の名は阿辺正行(仮名)という。阿辺は「常識」とは無縁な存在で、それが人にとっては無頓着でいい加減に見える。しかし、このような阿辺の態度が、大林にとっては、むしろ指の欠損という負い目を忘れさせ、一種の安心感を与える。阿辺のような詐欺師は、公平な態度でありのままを受け入れる寛容性と、社会性の欠如の両面

7) 構築主義やエスノメソドロジーといったアメリカの社会学理論も、原理的には同様の考え方をする。これらの理論に関しては後述する。

8) トーマス・マン「詐欺師フェーリクス・クルルの告白」『トーマス・マン全集Ⅶ』新潮社、1972年、264頁。

9) 山崎哲・芹沢俊介『〈恋愛〉事件 PARTⅡ』春秋社、1989年、61頁。

10) 同上65頁。

11) 同上69頁。

を兼ね備えている。

また、阿辺は大林に対して暴力を振るったり、横暴な態度に出たことはない。阿辺は公判で「(大林を) おどしたり、叩いたりなんかしていませんよ」と明言している<sup>12)</sup>。自分に対して、負い目を感じさせることなくふるまい、けっして暴力をふるわない阿辺という男。この阿辺に、大林は、自分が騙されているかどうか、その正体が何であるかどうかの判断を停止して、誘惑され、金を貸し、あるいは貢ぐことに自分の身を任せていく。

### 相互同調関係

大林はほとんど一瞬のうちに男の言葉、男のつくり出す世界にのめり込んでいる。単に、男の言葉を疑ってかかることなく、安易に受け入れたという消極的な意味でだまされたのではなく、積極的に男の世界に没入していったのである。

一般に、詐欺的な関係は、突発的にはじまる。詐欺師の言葉は、疑われることなく、即座に全面的に受け入れられる。あるいは、もう少し正確に言えば、信じる、信じないといった信用や信頼の問題が生じようがないところで関係が結ばれる。このような関係は、ふたり以外の第三者が介入しないかぎり続いていく。そこには、ふたりのあいだの情報量の差を云々する以前の関係がある。

ジンメル視点に立てば、詐欺師は、ある情報を意図的に隠蔽し、秘密をつくることで、相手をだますと考えられる。しかし、このような視点では、詐欺師と詐欺師に付き合う女性との間に築かれた、第三者を拒絶する独特の関係を十分に考察することはできない<sup>13)</sup>。なぜなら、詐欺師の秘密は、第三者の介入によって詐欺が詐欺として発覚した時点ではじめて暴露されるからである。それ以前の段階、つまりだます側とだまされる側が共謀の感覚で結ばれているとき、お互いのあいだに

秘密があるかどうかは問題ではない<sup>14)</sup>。

そのとき、だます者とだまされる者とのあいだに生じているのは、言葉が介在する以前の根源的な関係である。西原和久は、アルフレッド・シュッツに準拠しながら、こうした関係を「相互同調関係」と呼んでいる<sup>15)</sup>。それは、身体的に、お互いに波長を合わせていく関係を意味する。大林と阿辺は、まさにこうした相互同調関係を築きあげていた。大林は、阿辺がどのような人物であるか問う以前に、いとも簡単に男と同調したのである。

同調する者同士のあいだには、固有のリズムが鳴り響く。この点を示すために、シュッツは、音楽の演奏のなかに典型的な相互同調関係をみようとしていたが、それは、音楽が社会的な産物のひとつであることをあまりにも過小評価している<sup>16)</sup>。音楽の共演などに比べて、詐欺師とだまされる者との関係は、はるかに相互同調的であろう。なぜなら、相手がどのような人物かは意に介すことなく、突然関係が生まれ、固有のリズムを持つとしかいいようのない関係がつくれるのだから。そこでは、詐欺師もだまされる者も、相手を社会的な属性を持った存在としては捉えない。相手は、言葉によって社会的意味づけがされる以前の一種の「純粹経験」に近いものとして「経験」されるのである<sup>17)</sup>。

ウィリアム・ジェームズが「無記の、無限定な現実態」<sup>18)</sup>、つまり意味を成さない、あるいは意味が付与される以前の生の現実として定義した純粹経験は、瞬時のうちに意味が与えられ、それ自体としては消え去ってしまう。こうして、あらゆる体験は、意味を付与されていく。これは、詐欺的な関係でも一見同様に見える。阿辺が大林に「ゴルゴ13を追って旅をしている国際秘密諜報員」とほとんどの人にとっては荒唐無稽に見える自己紹介をするとき、すでにふたりの関係は意味づけさ

12) 同上73-74頁。

13) ジンメルには、「コケットリー」に関する興味深い考察があり、こうした関係を無視していたわけではないが、『秘密の社会学』の議論の中心は、やはり詐欺の発覚以後に置かれている。

14) この意味で、正村俊之の説とはうらはらに、コミュニケーション自体が本来的に秘密を生み出すわけではない。正村俊之『秘密と恥』勁草書房、1995年。

15) 西原和久『意味の社会学』弘文堂、1998年、78頁。

16) シュッツは、制度的側面を重視したアルヴァックスの音楽論を批判しながら、現象学的音楽論を展開している。

17) 藤谷忠昭「W. ジェームズの純粹経験の概念について」『社会学評論』vol. 50, No. 1, 1999年、78頁。

18) ウィリアム・ジェームズ『根本的経験論』白水社、1976年。

れは始める。しかし、この意味づけは、大林にとっては、まったく新たな冒険のはじまりであった。「ゴルゴ13を追って旅をしている国際秘密諜報員」であるという男の自己紹介は、荒唐無稽なのではなく、瞬時のうちに既成の知識（これを常識と呼んでもよい）から大林を解放する。もはや、見知らぬ男に電車のなかで声をかけられても答えてはいけない、銀行員が架空の貸付をすることは許されないといった知識は意味を成さない。代わりに、新たな可能性、選択肢があることを実感させられる。大林はここで「変身」するのである。

一方、阿辺の方は、最初から自分の言葉に対して、意味があるとは考えていない。もう少し厳密に言えば、阿辺の言葉は、社会的な文脈のなかに位置づけられることなく、発せられている。阿部の言葉に根拠がないといういい方もできるが、根拠がないのは、阿辺と大林以外の者にとってであり、大林にとっては、阿辺の一言はまさに新たな現実をつくり出す言葉なのである。

## 二重の現実

ゴルゴ13のエピソードからはじまる一連の物語は、当事者である大林と阿辺にとっては現実そのものにほかならない。しかし、当事者以外の者にとっては、まったく反対に現実性を欠いたものとみなされる。ここでいう現実性は、第三者から見ても了解可能なものを意味する。あるいは、制度の枠内で、ある行為が実現可能かどうか、現実的か否かの判断の分かれ目となる。つまり、制度的な現実、あるいは社会的な現実が、当事者の生み出す非社会的な現実、当事者に固有の世界とは別に存在するのである。ただ、多くの場合、このような現実の二重性が、明るみに出ることはない。なぜなら、通常の関係では、当事者間の現実には、制度の枠組みを逸脱しないように細心の注意が払われているからである。

ところが、詐欺的な関係では、このような用心深さはない。それどころか、当事者は相互同調的な関係を維持するために、部外者と接触するのを極力避けようとする。詐欺的な関係は、社会性を帯びることを嫌うのである。しかし、それゆえに人間関係が本来的に抱えている非社会的な側面

が、露わになる。非社会的な現実と社会的な現実の両面性が、詐欺的な関係では分離してしまうため、結果的に、制度の枠内で築かれた関係では見えない現実の二重性が明らかになるのである。

## 2 詐欺と哲学

### 反＝詐欺の哲学

詐欺師は制度に対して配慮することなく、当事者たちだけが了解可能な現実をつくり出していく。現実には、想像され、創造される。現実には根拠があるか、実現の可能性はどの程度あるのかといった問いは、そこでは考慮の外にある。哲学においては、現実を成立させている根拠を何に求めるかは根本問題であるが、詐欺はこのような哲学的な問いを無効にしてしまう。反対に、現実の根拠を問う続けることは、不確定なものを排除し、確実性を求めていくことである。いいかえれば、確実性を求めることは、詐欺的な関係を不確実で、危険に満ちた関係とみなすことにつながる。

確実性を徹底して追及したのが、17世紀の哲学者ルネ・デカルトであることは知られている。

私は、行動するときにはっきりと物事を見定め、この人生を安心して歩むために、常に真と偽を見分けられるようになりたいと強く願っていた<sup>19)</sup>。

安定した人生を送るためには、物事の真偽を確かめる術を身につけなければならないとデカルトはいう。デカルトには、不確定な部分を除去し、確実なものを追求しようとする強い姿勢があったのである。確実性（それは同時に安定を意味する）は、真と偽を厳密に区別することによって得られるはずだとデカルトは考える。そこで、真実とは何かを追求するために、デカルトは、書物を読み、旅をするが、何ひとつとしてデカルトを納得させるものはない。一見真実を論じているようにみえる哲学も、実は単なるみせかけの真実を提示しているにすぎない。そして、ようやくあらゆるものを疑った後に、疑う自分自身は疑いえないという「真実」に到達し、有名な「われ思う、ゆえにわ

19) Descartes, *De la methode*, Gallimard, p. 39.

れあり」の格言が導き出されるのである。

デカルト哲学は、真と偽を厳密に区別すべきであること、それを可能にするのは自己であることを説いた点で、決定的な意味を持つ。それは、人間関係が常に詐欺的な側面を持つという考え方を許さない思想が誕生したことを意味するからである。「私」は常に相手の真意を掴まなければならない。ここで、相手の言葉の真偽を常に確かめようとする独立した存在として、「私」は捉えられたのである。したがって、「私」は、常に裁判官や科学者のように、事物の真偽を確かめていかなければならない。自らも、人をあざむくようなことをしてはならない。

デカルトの思想が、「私」を判断の基準におくことをよしとする近代的個人主義の出発点にあるという指摘は、いい尽くされている。ただあえて、ここで今一度確認しておくべきなのは、真偽の区別を厳密に行うべきだという脅迫観念が、個人主義を導いたという点である。あざむかれることへの恐怖と不安が、過剰に個人の自立性を説く思想を生んだのである。この意味で、デカルトの思想は反＝詐欺の哲学と呼んでよい。

デカルトの反＝詐欺の哲学に基づけば、コミュニケーションは、自ら真偽の判断ができる個人同士が、お互いに議論するところに生まれるはずである。コミュニケーションには、本質的に詐欺を生むような性格があるなどという考え方は、ここでは完全に否定される。

### 真偽の区別と道徳

個人が、物事の真偽を理性に基づいて判断しなければならないという反＝詐欺の哲学は、当然のことながら、うそを嫌う。個人は、自己の意思に基づいて、これに忠実に行動する存在であり、相手に自分を偽ってはならない。これは、真偽の区別が、道徳に直結したことを意味する。想像力が生み出した世界は虚偽、誤りあるいは空想の世界として退けられ、これに「事実」が対置される。事実の収集、分類、体系化を通じて、正誤が判断

される。したがって、事実そのものの力によって、想像力によって築かれた世界は否定されていく。反＝詐欺の哲学は、あらゆる道徳がそうであるように、正しいものと誤っているものを区別しようとする。しかし、他の道徳とは異なり、それは正しさを事実に基づいているかどうかで判断する。

これは、今日では当たり前のようにみえるが、デカルトの生きた17世紀のヨーロッパでは、必ずしも、唯一の道徳観ではなかった。たとえば、デカルト哲学を批判的に捉えていたブレース・パスカルの場合、最も重要なのは、行為が他人にとって自然にみえることであった。パスカルにとって、行為の選択の大半は無意識の内に行われ、またそうあるべきであり、自然に振る舞えることこそが「徳」なのである<sup>20)</sup>。当人が実際にどう思っているか、その真意を問う必要はなかったのである。

そもそもヨーロッパ中世では、しぐさやふるまいの「かたち」こそが重んじられていた<sup>21)</sup>。たとえば、中世の騎士が神に誓うとき、それは魂の誓いを意味しない。騎士が何を考えているか、どのような内面的葛藤があるかなどということは問題ではない。神への誓いは、誓約の儀礼を忠実に遂行していくなかで、それを態度で示すことである。いかに騎士らしくみえるかが、騎士にとってもそれ以外の人々にとっても、最大の関心事だったのである。

### 想像力の哲学

パスカルはデカルトとは異なり、想像力が、人間にとって重要であることを見抜いていた。パスカルによれば、想像力は、偽りを生むだけでなく、真実を伝えるときにも必要になる。それは、パスカルが人を実際に動かすのは、理性ではなく、想像力だと考えていたからである。女は、この男は詐欺師にすぎないのではないかと理性的に判断するのではなく、男の想像力がつくり出す世界をそのまま信じる方を選ぶ。同様に、人々が裁判官や医者信じるのは理性によるものではなく、彼ら

20) Pascal, B., *Pensées*, 1670. Gallimard の Folio (1977) を参照しているが、断章の番号はそこで用いられているものではなく、古典的な Brunsvicg 版にしたがっている。例えば、frag. 252は Brunsvicg 版の断章252番のことである。また訳文は、津田稷訳『パンセ』新潮文庫、1986年の翻訳に筆者が手を加えたものである。

21) Duby, G., *Le Temps des cathédorales, l'art et la société de 980 à 1420*, Gallimard, 1976.

が人間の想像力に訴える術を心えているからである。

われらが法官たちは、この（想像力が理性に勝るといふ）秘密をよく心えていた。彼らの赤い法服、彼らの身を包む猫の毛皮で裏打ちされたいたちの毛皮のマント、裁きを行う法廷、ゆりの花、堂々たるこれらの道具立ては、いずれも必要不可欠だったのだ。もし、医者たちが長衣や上靴を持たず、博士たちが四角い帽子やどの部分も妙にゆったりした衣服をつけていなければ、彼らは世人をあざむくことができなかつたであろう。世人は、厳肅な装いには弱いのである。もしも、法官が正しい裁判を行い、医者が真の医術をおこなうことができるのであれば、四角い帽子など無用のものとするだろうし、彼らの学識の尊厳は、それだけで十分に保たれるであろう。しかし、架空の学識しかもたないものだから、彼らは、これらのむなしい道具立てを用いて、世人の想像力に訴えなければならぬ。また、実際、彼らはこうして尊敬を受けるのである<sup>22)</sup>。

このパスカルの興味深い指摘は、人を魅了するためには、人を「あざむく」必要があることを物語っている。女をだます男だけでなく、裁判官や医師も、想像力に訴えながら、人をあざむく。そうしなければ、彼らの地位を維持することはできないとパスカルはいうのである。

### 制度的な現実

パスカルは、法や医学のような知識が、実は見えない制度として人々を拘束していること、その知的権威が実は根拠のない詐欺的なものにすぎないことを指摘している。それは、19世紀から現代にいたるまで綿々と続く社会批判理論を先取りしているように見える。たとえば、ピエール・ブルデューは教育制度について論じながら、「彼ら(学校の教師)が、客観的にみて果たすべき役割を果

たすためには、彼らが実際に果たしている役割とは別のことをしていると思込んでいること、また、彼らが果たしていると思込んでいる役割とは別の役割を果たしていること、そして彼らが果たしていると思込んでいる役割の価値を彼らが信じていることが必要である」<sup>23)</sup>という。

このブルデューの理論のように、当事者が制度の真の意味、実際の効果についての認識がないときに、制度は最も効率よく機能するという説は、制度そのものの虚偽(=詐欺)を暴くことを目的としている。ここで、社会学者は、制度の秘密を暴露し、真実を語るができる唯一の存在である。

これに対して、パスカルは、制度の欺瞞を指摘するとき、ブルデューのように、「客観性」の名のもとに、真実を語る立場に立つわけではない。おそらく、パスカルが問題にしたかったのは、本論で指摘してきた現実の二重性ということであろう。一種のうさん臭さ(詐欺性)は、あらゆる人間関係に付随している。制度の枠内で築かれる人間関係でも、そのなかには当事者同士にしかわからないような一種の共謀関係、あるいは同調関係が築かれている。医者は単に合理的に診察し、処方するだけではない。名医は、患者の想像力を満足させるように、ふるまう術を心えている。また、患者は、医師に対して正確な診断を期待するだけでなく、医師がイメージ通りにふるまうことを願っている。医師と患者とのあいだには、相互同調関係が築かれていなければならないのである。

ここでパスカルが問題にしている想像力は、宙に浮いたただの幻想、あるいは空想の世界ではない。それは、ある意味で物質的でさえある。毛皮のマント、裁きを行う法廷、ゆりの花、長衣や上靴、四角い帽子等々の具体的なモノが、想像力を喚起するのである。これらのモノは、身体を装うためのモノであり、想像力は、身体を通じてその力を発揮する。

事実、パスカルは、デカルトとは正反対に、身体の重要性を認識していた。パスカルは、人間は、理性的に行為の選択をする精神であると同時に、無意識の内に、あるいはまた、感情の赴くままに

22) Pascal, B., frag. 82.

23) Bourdieu, P., *La Noblesse d'Etat*, 1989, p. 61.

行動する「自動機械」でもあり、しかも、理性の働きは緩慢で、すぐに「眠り込むか迷うかする」<sup>24)</sup>という。したがって、たとえば真の信仰が成立するには、理性の力で精神を納得させるだけではなく、自動機械、すなわち、無意識にふるまう身体も同時に納得させねばならないと指摘する。想像力は、意識の産物であるだけでなく、身体を通じて、行使されるのである。

### 詐欺の社会理論

さて、今一度、足利銀行横領事件に戻ろう。この事件は、銀行員であった大林が架空の貸付をでっち上げて、そこから巨額を引き上げた事件で

ある。この事件の比較の対象として興味深いのは、バブルの時代に起こった大手銀行や金融機関による一連の不正貸付事件である。返済の当てがないにもかかわらず、巨額の融資を続けるのは、事実上、架空の貸付を行うのと同じである。つまり、大林の個人的な行為と、大手銀行や金融機関が組織的に行った行為とは、質的にはほとんどどちがいはない。これは、何を意味するのか。この問いに答えることは、制度とは何か、そして、社会とは何かを解き明かすことにつながるであろう。それは、「詐欺で読む社会」とでも名づけられべき一冊の書物のなかで展開されるはずである。

## INTRODUCTION TO A SOCIOLOGY OF FRAUD

### ABSTRACT

Communication always has a “secret” part, because no one can understand perfectly what the other thinks. This characteristic of communication provides the occasion for fraud. As Simmel said, we can tell the truth as well as we can deceive the other. This paper tries to make the term, “fraud”, a key concept of sociology. In fact, this term allows us to survey the history of sociology and to understand what is “Society”, the main issue of sociology.

**Key words:** communication, fraud, secret

---

24) Pascal, B., frag. 252.